The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	集団検診雑感
Author(s)	中野, 陽典
Citation	癌と人. 1978, 6, p. 18-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24172
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

集団検診雑感

中野陽典*

昭和43年の秋に，芝教授（現大阪府立病院長）の指揮のもとに乳癌の集団検診が始った。対象は，吹田市と箕面市の婦人であった。昭和53年の夏を迎え，丸10年の歳月が流れ，それと共に乳癌の検診は続いた。芝教授は大学を去られ，当初から乳房X線撮影で，集検者の精密検査を引き受けておられた山崎先生も，滋賀医科大学へ転出された。開始以来，実際面を担当された大向先生は，川崎医科大学へ移られた。その他にも直接検診に出向かれた多くの医師や，看護婦，事務員の方々が，微研を離れていかれた。10年の間の，乳癌の集団検診にたずさわった大阪大学微研病院の人達だけの動きを見ても，重みのある年月を感じるのである。この間に蓄積された乳癌の集団検診に関する資料は，多くの学会等で報告され，今や一つの貴重なモデルとして，あちらこちらで参考にされている。日本対ガン協会が，乳ガン集団検診の手引きとして出した試案にも，われわれの資料が大きな貢献を果したものと思われる。

10年間の成積を検討し反省してみよう。延20695 名の方が検診を受けにこられた。乳房の数にして41390 コである。一人で何回も受けられた方もあるので，実際の人数は 12316 人となる。この中から乳癌と診断された方が35名であった。延人数の 0.17 %，実人数の 0.28 %である。この数字が以外に多いのにおどろく。胃癌の集団検診もこれに近い値だといわれる。わが国のガンで最も多いとされている胃癌に，あまり劣らない発見率なのだ。さらに次のデーターに驚かされる。この10年間で昭和43年に受診された方743 名の中から6名（ 0.8%）の方に乳癌が発生している。高率である。やはり毎年毎年検診を，お受けなさいと進言しなければならない。

集団検診は早期発見に役立っているだろうか。たしかに早期にみつかる方も多い。一方では35名の集団検診でみつかった癌患者の方々から6名（17.1%）の方が亡くなっている事実に注目しなければならない。この現実をみると，市民の方にもっともっと乳癌について知っていただき早期受診を実行していただく必要を感じる。

年々受診者が増し，検診側の能力も限界に近づきつつある。しかしこの10年間の成績をみれば，さらに続けねばならないと思われる。来たる10年間，いやもっと続けられれば，さらに種々の事実がわかるだろう。それよりも，乳癌から救われる方がまた幾人かでてくるであろう。これが大切なのだ。乳癌集団検診をお世話下さる諸団体の関係者の皆様の一層の御協力でより効率のよい検診が継続されることを祈っている。

癌の中で増えているのは，乳癌と大腸癌で，この二つの癌は，ある人種の中で同時に変動していると言われる。すなわち乳癌の多い国には大腸癌も多いと言う事で，食生活が関係するのか，とにかく興味ある現象である。我国において乳癌がふえてきた，と言うことは大腸癌が増えている。これは事実なのだ。胃癌の検診はよく普及し，子宮癌も，肺癌も，乳癌もこれにおいつこうとしている。しかし大腸癌の検診はなかなかやっかいである。直腸癌は直腸鏡で検診できる。やってみると案外希望者は少ない。理由は？　自分には関係がないと思っている。はずかしい，きたない等と考える。実際自分が受ける身になれば，そうかも知れない。胃のように口からバリウムを飲んで検査をやろうと思えばできるが，かなり大がかりなことになり経費もかさむ。これでは普及させにくい。集団検診は簡単で，受ける人にあまり肉体的，精神的な負担にならない方法が好ましい。検便はどうだろうか。便のせん血反応は簡単にしらべられる。受ける人に苦痛はない。何度でも繰返せる。一

* 大阪大学講師（大阪大学微生物病研究所附属病院外科）

回の検査で陽性と出れば，せん血反応の検査に大切な食事の内容の制限を行いまた再度検査を受ける。それでもせん血反応陽性であれば，口から，肛門までの間のどこかから血がでている可能性がつよい。こうなれば，食道・胃・小腸・大腸と検査してみる。勿論，癌ばかりが出血をおこすのではないが，検便は一つの癌のスクリーニングの方法である。癌を治療するものにとっては，待っていて治療する時代から，癌をさがしに出かけて治療する時代になりつつある。癌の治療を受けるものは，症状がでる前に発見してもらうよう努力する時代となっている。大阪癌研究会では，検便により消化管（口から肛門まで）の癌をスクリーニングすることにした。乳癌同様10年間ほど，やってみればその成功，失敗の結論はできるだろう。ただこの場合，せん血反応が陰性だからと言って癌がないと言い切れないのが欠点である。陽性のときにのみ意味があるとも言える。どこかに異常を感じれば，せん血反応のみが陰性でも，くまなく検査を受ける必要のあることは言うまでもない。

身体に異常を感じる人は別にして，全く健康だと自信をもっている方は，一年に一度便のせん血反応をしらべてみてはどうであろうか。健康であることを，さらに確認して一層，日々を明るくすごす。せん血反応が繰返し陽性にでた人は，レントゲン検査，さらに必要があれば，胃カメラをはじめとする内視鏡検査等で出血の原因をたしかめよう。癌でなくて安心できることが大部分だろう。不幸にして癌がみつかれば，不幸中の幸いである。手術→治癒となる。

大腸癌の多くは，血液中に癌胎児性抗原(CEAと称する特殊な物質)を分泌する。これも検診に利用できないか。わずかな血液が，検査への足がかりを提供することになる。あまり早期の癌では分泌されないのが欠点であるが，乳癌の時同様，癌は，知らないうちに進んでいることもあるのである。今後集検の方法の検討が行われる際には，是非考慮しても良い方法だと思う。

新しい癌の発見法，しかも集団検診に利用したい簡単な方法は，容易に開発されるものではないだろう。今は少々効率が悪くても，簡単にできる検査法を総動員して，つぎつぎとスクリーニングを行っていく。これが大切と思われる。行政面からの積極的な支援があれば医療機関や衛生奉仕団体の人々を勇気づけ，癌の早期発見運動は盛り上がるだろう。

以上乳癌の集団検診の経験と，これから，押し進めようとしている便せん血反応の集団検診について思いつくままを記してみた。